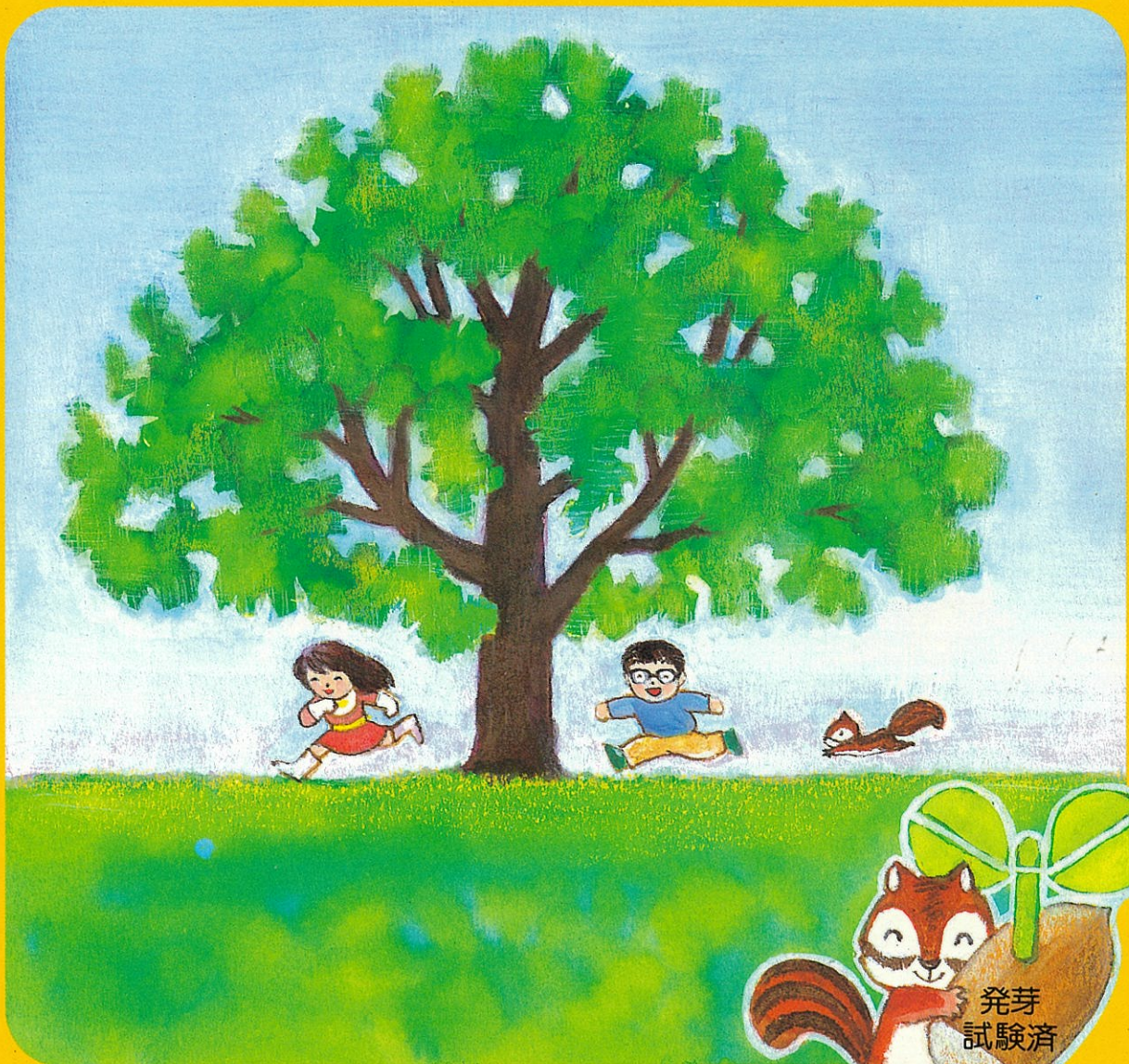


だいたいなどんぐり



まきどき=いま!



横浜市緑化センター
財団法人 横浜市緑の協会



ぼく のぶおと いいます。

きょうは ^{しゃせいかい} 写生会。

でも、この ^{はいいろ} 灰色の ^{そら} 空と ^{うみ} 海を ^み 見ると

^{いろ} 色をぬる ^{きも} 気持ちになんて

とても なれないや。

「あなたのいう とおりだわ。

こうしたら どうか。

^{あお} 青い ^{そら} 空 ^{あお} 青い ^{うみ} 海 ^{みどり} 緑の ^{もり} 森……」

「ちょっと まってよ。

きみ だれ？」





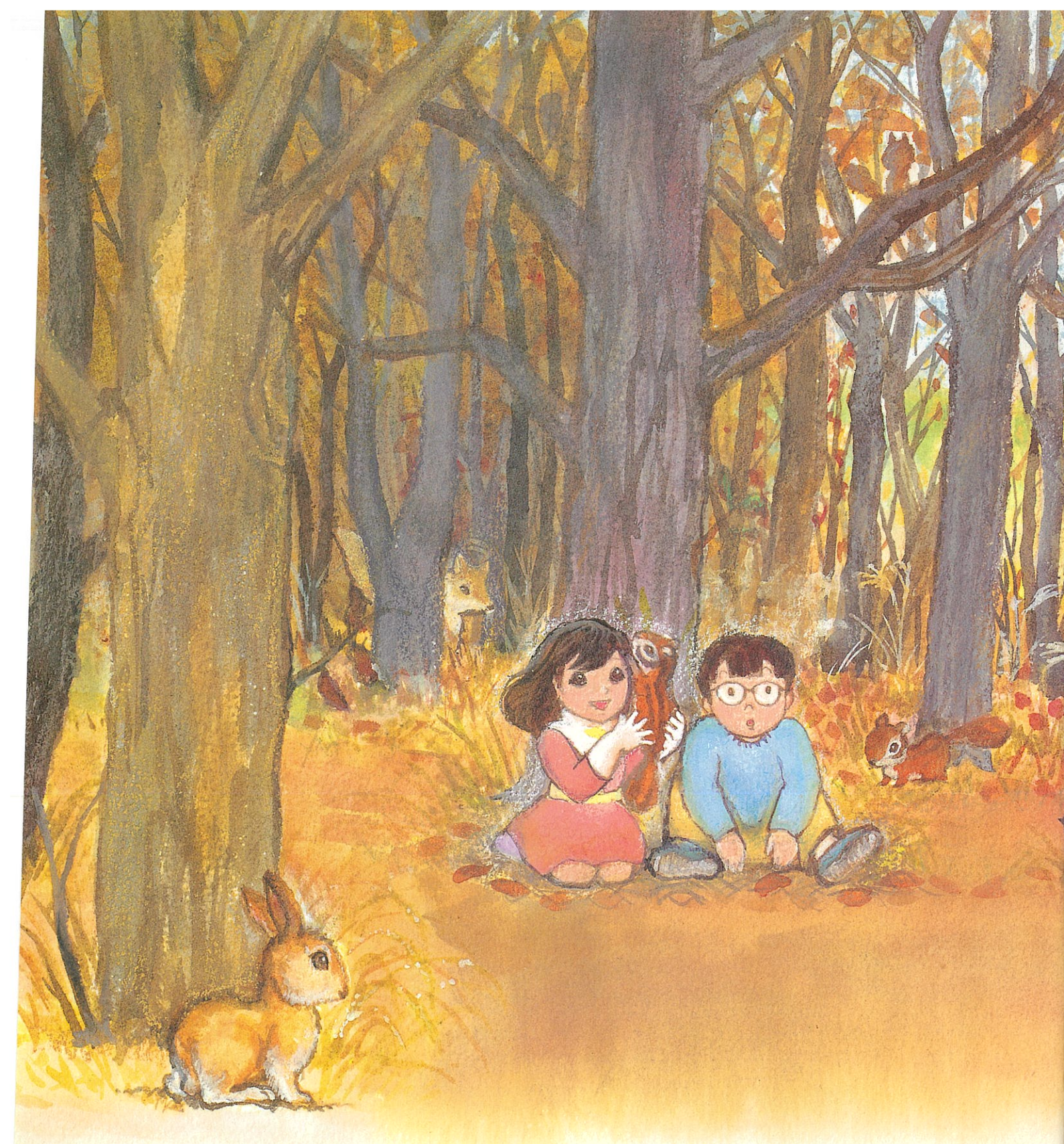
「あっ、たいへん！
このリスを つかまえて。
ひとりじゃ かえれないのよ。」

「わかった！」



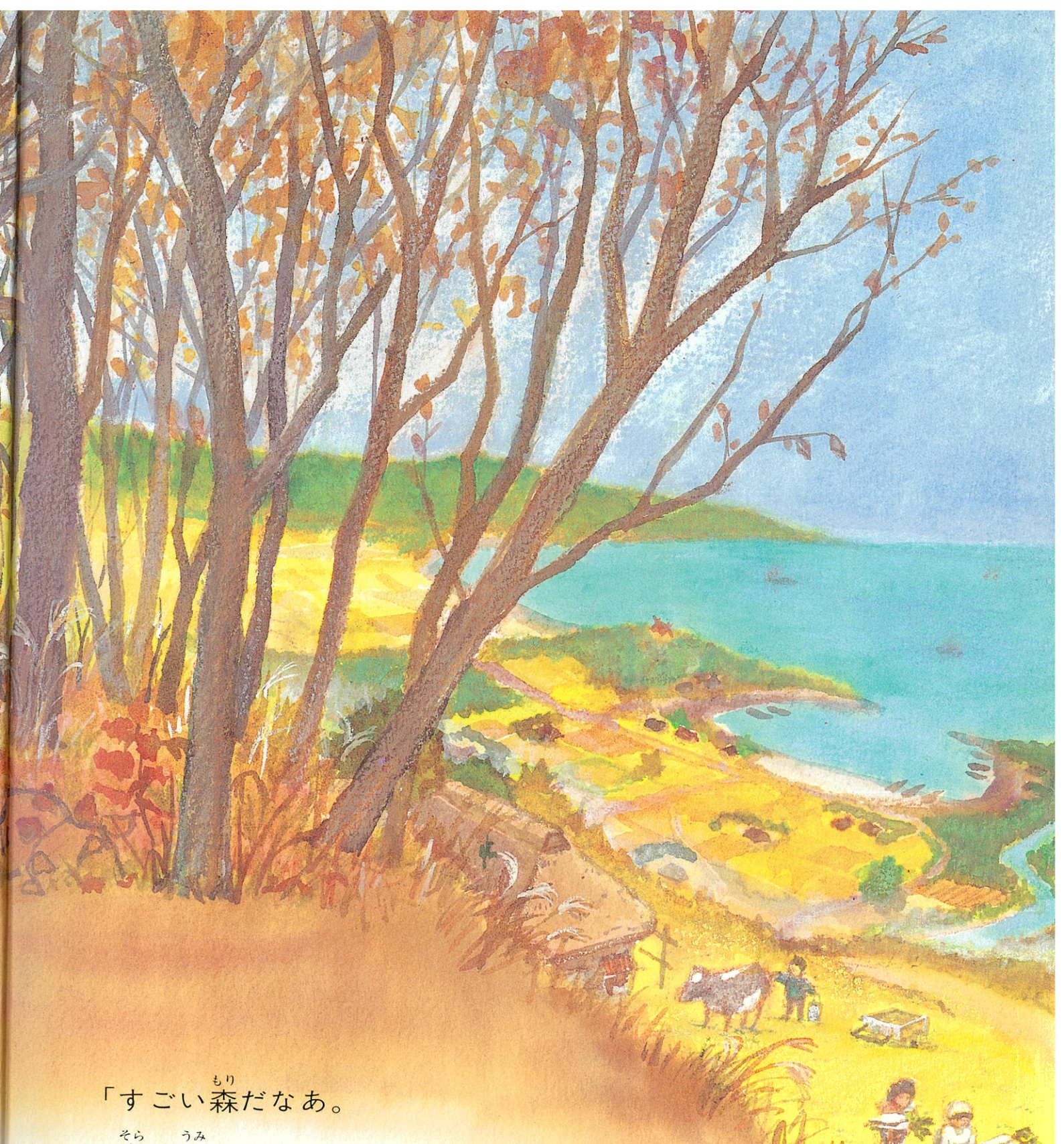
「あれっ！
どうなっちゃってるの。」





「ここは どこ？」

「さっきと同じところ。でも 50年前なの。
この子のふるさとよ。」



「すごい森だなあ。」

「空も海も きれいだねえ。」

「知ってる？ この一本の木が、20人の人が
よごした空気を きれいにしてくれるの。
あなたが 生まれるまでに いくつかの森が
なくなってしまったわ。」



「ねえ きみの^{なまえ}名前は？」

「わたし フェアリー。

この木^きのお話^{はな}しを

きいてみない？

そっと ^{みみ}耳をあてて

目をとじると

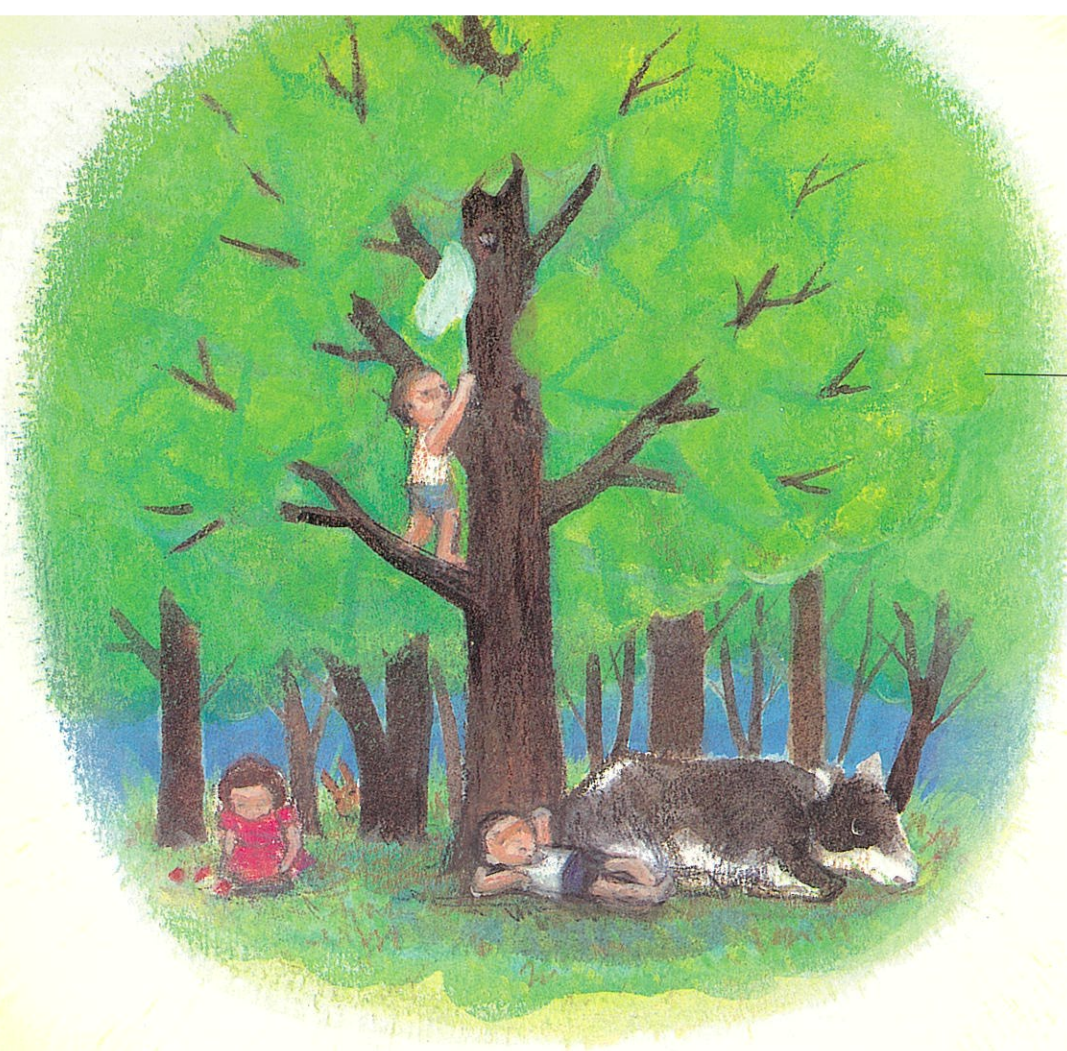
ほら

きこえてくるでしょう。」

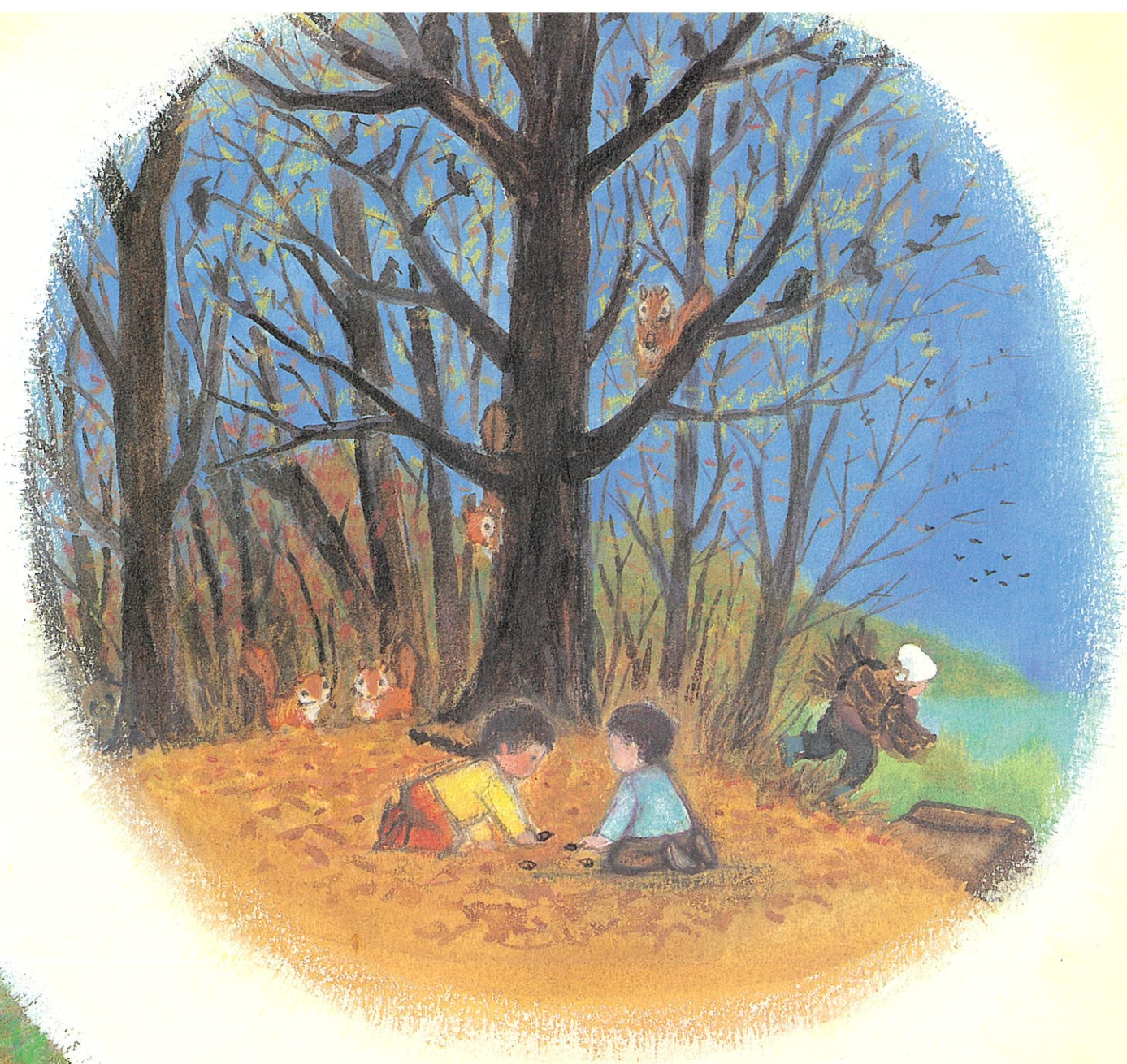
—わしが ^うここで生まれたのは
のぶおのじいさんの そのまた
じいさんのころじゃ。
おおきな なかまたちに
まもられて
ふたばを ひらいた。



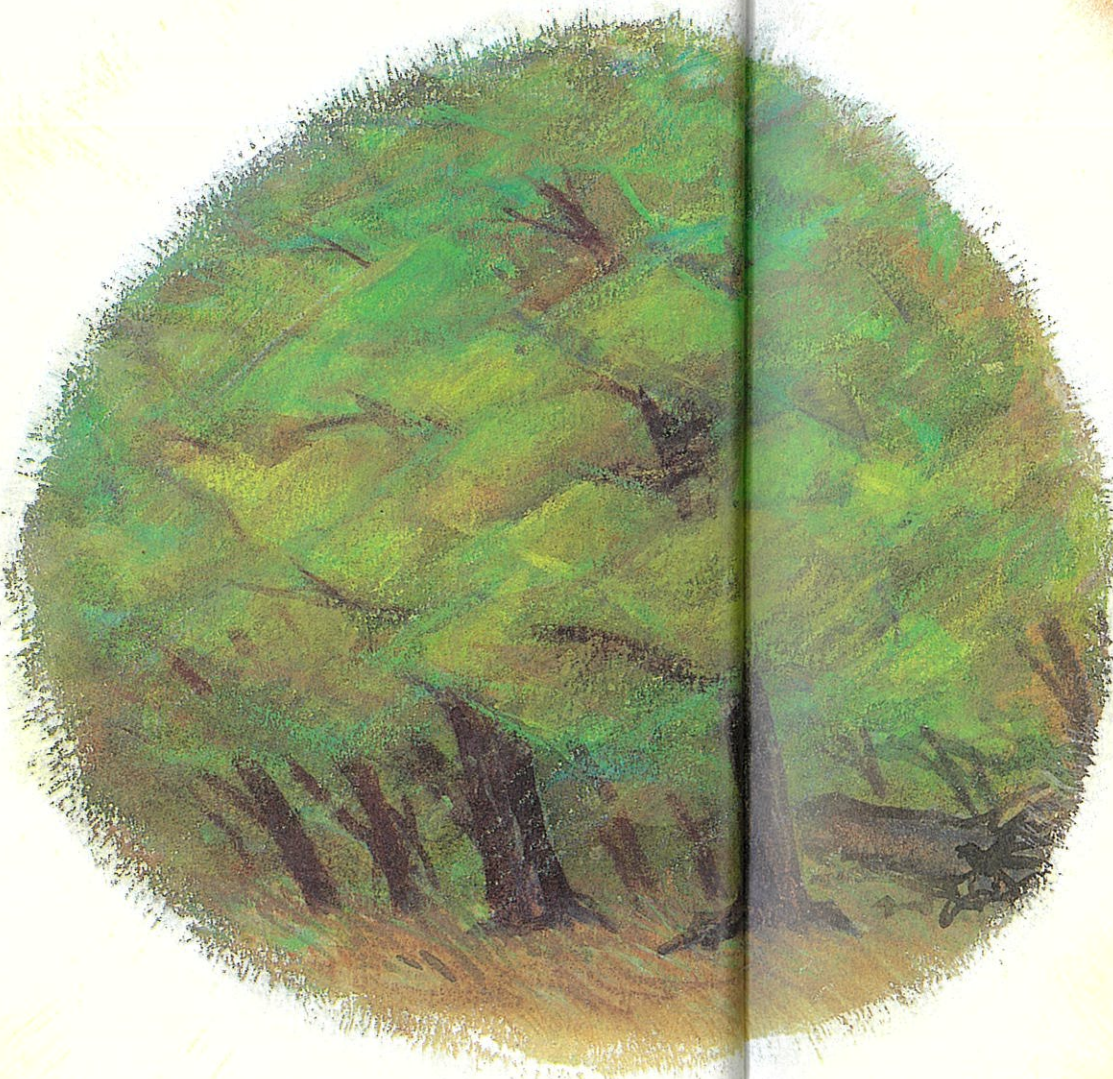
—おまえのじいさんが ^こ子どものころには
ずいぶん おおきく なっておった。
^{はる}春になると、まず ^こ子どもたちが のぼってきてな。
それは それは うれしかった。



—^{なつ}夏になると
わしらの^{もり}森は
すずしくて
みんなに とても
よろこばれたもんだ。



—^{さむ}寒くなると
^{もり}森の^{どうぶつ}動物と^こ子どもたちが
ドングリを ひろいにきてな。
おとなたちは たきぎをあつめ
^{えだ}枝の^{うえ}上で ^{とり}たくさんの鳥たちが
はねをやすめた。
そして、じっと^{はる}春を^ま待つのが
たのしかったんじゃが……



—^{たいふう}台風がくれば
^{ちから}力をあわせて ふんばったぞ。
^{おおみず}大水がでないように
いっぱい ^{あまみず}雨水を のんだんじゃ。
^{ちから}力つきて たおれたなかまを^み見て
ないてくれた^{ひと}人も おってな。

「ねえ フェアリー、

この木が こんなに長く 生きてきて

いろんな話を 知っているなんて、

びっくり したなあ。」

「それなのに森の木は この一本を

のこして みんな 切りたおされて しまったの。

ほら この子

だいじなドングリを

あなたに あげたいと いったるわ。」

「ぼくに？」

「あなたに お願いしているのよ。

じぶんの子どもたちが くらせる森を

もういちど とりもどして ほしいって。」

「うん、かえったら きっと そだててみるよ。」





「のぶおくん、
写生会は ドングリひろいかい？」

見あげると 先生だった。

「先生、ここが おおきな森だったって
ほんとうですか？」

「ああ、ほんとうだよ。」

やっぱり ゆめじゃ なかったんだ。

「先生！ ぼく このドングリを うめて
ここを もとの森に もどそうと思うんです。」

「ハハハ。その気持ちは りっぱだけど
森が もとにもどるころには

きみは おじいさんだな。」

そういえば そうだ。

先生のいうことは もっともだ。



もともどすのが そんなに
たいへんなら どうして
こわしたり したんだろう。

^{もり}森ができて ぼくは あそべないんだ。

こんなドングリなんか。



のぶおくん!

つぶさないで!

カシャ





ぼくは フェアリーをまった。

ドングリのことを あやまりたかった。

この灰色の景色を ^{はいろ} ^{けしき} ^み 見ていたら わかったんだ。

あのドングリは ぼくが ^{もり} 森であそぶために
もらったんじゃない。

ぼくの^こ子どもや そのまた^こ子どもたち

そして、^{どうぶつ} 動物たちのために

^{もり} 森をとりもどさなくちゃ いけなかったんだ。



「あっ、フェアリー！」



「ごめんね。ぼく…」

「いいのよ、のぶおくん。

むかしだけじゃなくて

未来の世界も 見にいきましょう。」

「ねえ フェアリー

きみは どこから きたの？」

「そうね、もうすぐ わかるわ。」



「のぶおくん

ここが 未来の世界よ。」

「わあ きれいだなあ。

空も 海も 青くて

緑が いっぱいだ。

でも、あの黒い雲が

じゃましてるね。」

「ええ、あの雲は

ふつうの雲じゃないのよ。」

「ここが わたしのくに。」

ながいあいだ かかって あらゆるものを

ひかり みず かぜ うご
光と水と風で 動かせるようにしたの。

みんな つち 土に かえっていくもので

つくられているから、もう そら うみ 空も海も

よごれないわ。」

「いいところだね。」

「でもね、

もうひとつのくにが あるの。」





「それが この^{くろくも}黒い雲のくに。
ちかごろ この^{くも}雲が どんどんひろがって
わたしのくにの^{そら}空を おおいはじめているの。」

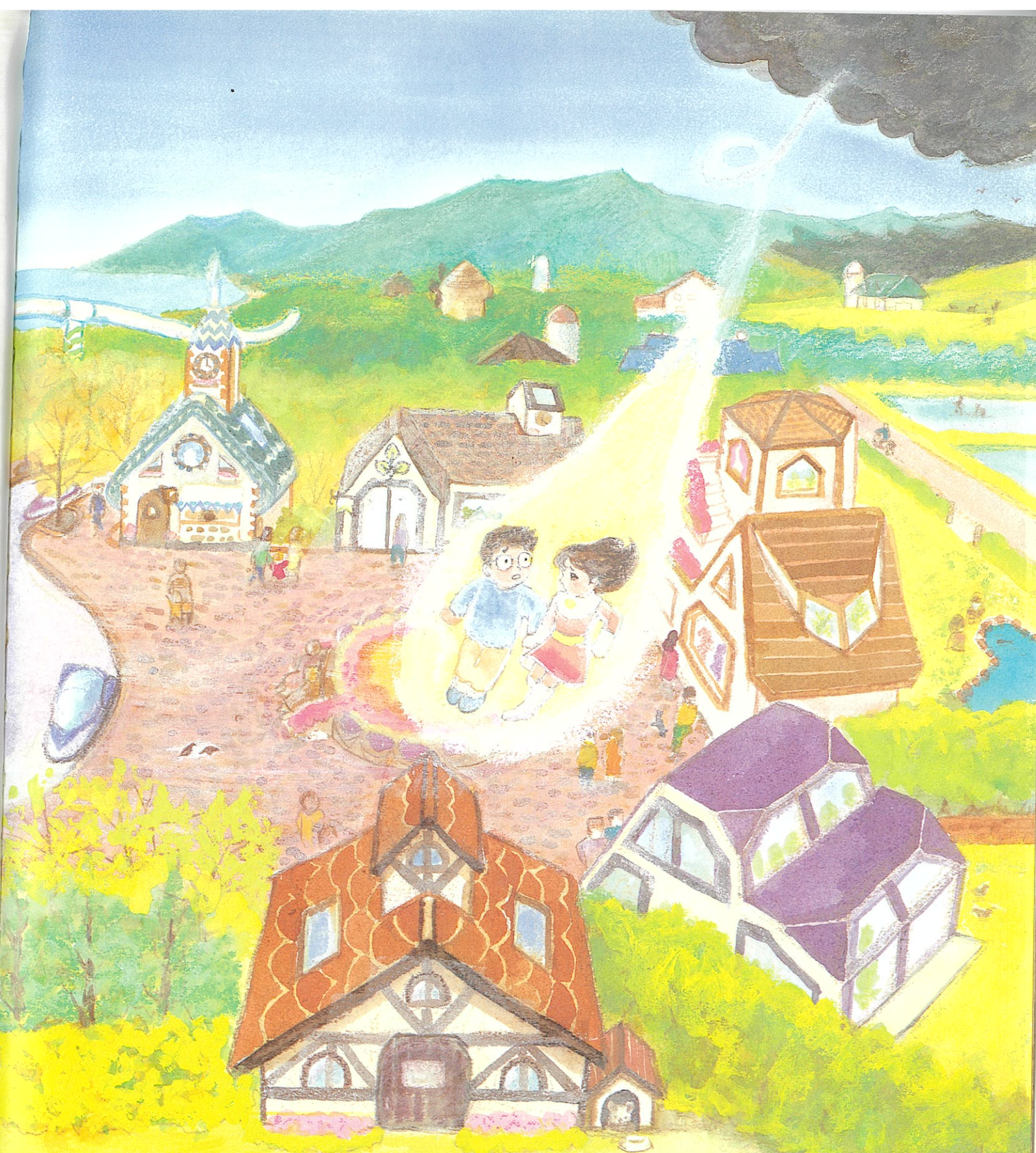
「うわっ！ ひどい^{くうき}空気だ。
^{いっほん}「本の^き木も ないじゃないか。」

「あそこは ^{べんり}べんりのまち。
なにもかも ^{べんり}べんりだけど、^{つち}土にかえらない
ものばかりで できていて ゴミでいっぱい。
^{くうき}空気も^{みず}水も よごれてしまって

もう なにも ^{そだた}そだたないわ。
むこうは ^{さいご}さいごまで ^き木があつたまち。
ぜんぶ ^{かね}お金にかえてしまって
いまは もう なにもないの。」

「フェアリー、これも^{みらい}未来だっていうの？」

「^{みらい}未来の^{せかい}世界はね、
のぶおくんの ^す住んでいる^{せかい}世界の人たちの^{こころ}心で
できているの。
だから、この^{くろ}黒い^{くも}雲を ひろげているのも
のぶおくんたちの^{こころ}心だし、
とめることが ^{できる}のも ^{あなた}あなたたちの^{こころ}心なの。
このままでは ^{いつか}いつか ^{たいよう}太陽がかくされてしまって
わたしたちのくには ^{ほろび}ほろびてしまう。」



「ねえ、フェアリー、 どうしたら いいの？」
「わたしたちのくにはのような^{みらい}未来が ^{くる}くることを
^{ねが}願ってほしいの。
その^{ねが}願いが つよく ^{おおき}おおきくなれば、
きっと わたしたちは ^{すく}救われるわ。」

「のぶおくん、わたしからのドングリ
よろしくね。」

「フェアリー、ぼく こんどこそ だいじにするよ。
でも、ぼく ひとりで きみのくにを ^{すく} 救うなんて。」

「あなたは ひとりじゃないわ。

^{おな} ^{ねが} ^{ひと}
同じ願いをもつ人は たくさんいるわ。

^{みらい}
未来は のぶおくんたちが つくっていくのよ。

あなたが できることを

^{みらい}
未来の わたしたちのために ゆっくりと

すこしずつ してくればいいの。

なにもしなければ ^{あお} ^{そら} ^{うみ} ^{みどり} ^{もり}
青い空と海 それに緑の森は

いつになっても とりもどせないわ。」

「フェアリー、きみは それをつたえに
きてくれたんだね。

ぼく もう きみのこと わすれないよ。」

「のぶおくん、

さあ ^め 目をつぶって

あなたのくにが まっているわ。」



フェアリー

あの日 おおきな木のところに

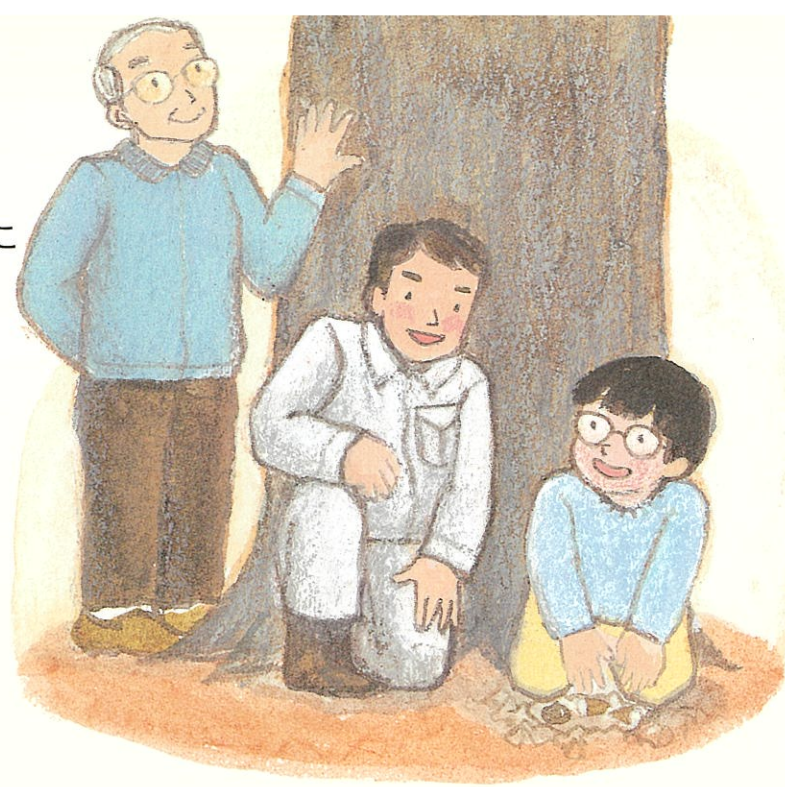
男の人が ふたりきて

この木は ずっと

切りたおされないことに

決まった

と はなしてくれた。



そのうえ ドングリを いっしょに うめてくれて

そだてかたまで おしえてくれたんだ。

きみのいったとおり ぼくは ひとりじゃない。

それに 家に かえるとちゅう

多くのおとなたちが きみのくにを 守るために

がんばっていることに 気がついたんだ。

黒い雲を ひろげているおとなたちばかりと

思っていたけど きみのくにを 救おうとしている

おとなたちも いるんだね。

フェアリー

きっと きみが 鳥や風になって 人びとの

耳もとで ささやいているんだね。



「やあ のぶお おかえり。

先生から 電話があつてね。

ドングリのこと あやまってたぞ。

いやあ おまえのこと

みなおしたよ。」

「この木は おとなりの

おじいちゃんから

いただいたのよ。

たねをまいて そだてたんですって。」

フェアリー!

ぼくは うれしかった。

あした 学校でも なにかが

かわっているかもしれない。





フェアリー

ぼくは いまも きみのために できることを
さがしつづけています。

きみのくには だいじょうぶですか。

がっかり することも あるけど

まだ ぼくに やれることは

たくさん あると思うよ。

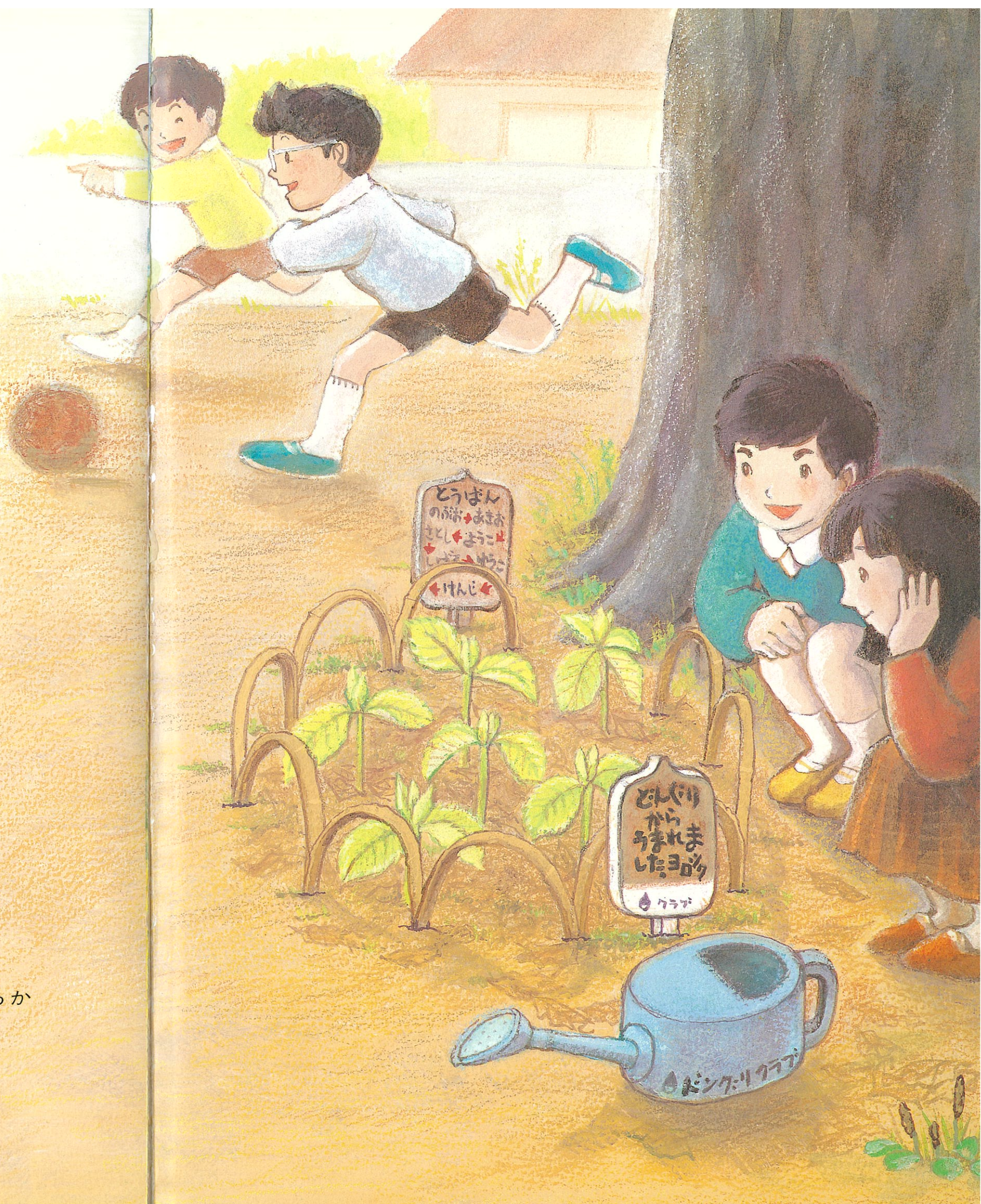
ねえ みんな

よかったら フェアリーののために なにができるか

かんが 考えてくれないかな？

そして ぼくと いっしょに すこしずつ

やっいてこうよ。



発行にあたって 横浜市緑化センター所長 佐久間 健生

私たち おとなは、昔の自然に恵まれていた頃のことを、なつかしく思い出
すことができます。人がたくさん住むようになって、街の中から大きな木や
林が消えていきました。なくなってしまった緑は公園や街路樹として、少し
ずつ街の中にとりもどされてきていますが、まだまだ不十分です。

みなさんのお家の近くに木を育てていける場所はありませんか。みなさん
が大きくなるとともに木も成長していきます。見上げるような木になるまで、
長い間、見守ってあげて下さい。

街に緑を 横浜国立大学教授 宮脇 昭

わたしたちの住んでいる横浜の街から、緑が急激に消えています。鎮守の
森に象徴される豊かな緑は、人間の生命と心を守る自然の基盤です。残り少
い緑を守り、ドングリをまいて育てていくようなその土地にふさわしい本物
の緑を創造していく、その担い手は、わたしたち、ひとりひとりの市民です。
明日の健康で豊かな発展の母胎を今、街の中や身近なところに創ってい
きましょう。



よこはま緑の街づくり基金は、多
くの市民からの寄付金を基にして、
身近な緑をつくり育て、緑の街づ
くりを進めています。

発行：横浜市緑化センター
(財)横浜市緑の協会
昭和60年3月第1刷発行
昭和61年3月第2刷発行

企画製作：横浜市緑化センター緑化指導課
緑化活動啓発絵本制作委員会

絵：まき ひでこ

印刷：朝日オフセット印刷株式会社

●横浜市緑化センター

〒240 保土ヶ谷区狩場町213番地 TEL 045-711-0635

●横浜市こども植物園

〒232 南区六ッ川3丁目122番地 TEL 045-741-1015

●(財)横浜市緑の協会

〒231 中区日本大通15番地 TEL 045-661-0691

©横浜市1985 NDC518.8